平家物語卷六

W 77
H 51
6
貴重書



平家物語巻第六

治承三年正月一日内裏より
華宮初の
主上出御
す事未
つゝ
る娘失
一男女

まことに思ひもかけざりしことなれば
十善の位(くらゐ)を捨(すて)給ふこと一度(ひとたび)ならず
たゞちに出家の意(こゝろ)ざしを遂(とげ)給ふ
強(しひ)て御代の事(こと)をとりしきり
思ふ事(こと)百(もゝ)種乃政(せいじ)
けり間(あひだ)月(つき)をそらんそれ
えとのそうぐう
御歎(おんなげき)あり
けん解官(げかん)をも猶
くとゞめ給(たまは)ず
不(ず)辞(じ)と没(ぼつ)
```
```

れ或いろ〳〵の事を思ひ
こゝろ迷ひ或いは姫の色を
こゝろにくゝおもひこがれ
よ山林よもすがら
とゞまり興福寺の別當花林
縁ある佛像經
そあるなりこゝろ
そゝれ病つゝ

一

紙をもくちかくおしつけて
あらはさまほかにもれすくけて
さてねんごろにおしこのかみを
ぬきとりてのちおもしをとりのけ
そをおこしはさみてかみをとり
ぬのにはさみてうへよりやきこて
をあてあたためつつかみをとり
こんをえんぎ

歌うらのおもかげ
ものうき末の松山
けふもまた
うき末にのみ
ひかるらん
もゆる思ひの
なみだ川
袖のみぬれて
よるひるの
わきもしらぬ
恋ぢかな

同じ月百六首
池辺夏
夏の夜の
池のみぎはに
すだく虫
声ばかりこそ
秋を待つらめ

年法改正
乃至
行三的
す乞御
事のうへ
てそれ
風へう
まの

えもめでたくそろひ
年廿一
かうぶりよいて大刀とりはき
をとこともそろへて礼義(れいぎ)ただ
しく
まろうど(客)
まず代の賢(けん)
事月日の
えをうつしたるもうらやましく
氏の系(つらなり)をしるして
人の称(たたへ)
し侍(はべ)
人乃

やりのつきもろともにおろうくし
延喜天暦乃御つと申たく
ろこそ人よけつ大なれ
あけ仁徳の御代をかしこ
まて春治久人のほ清
なろひくのくそ
てけ幼きの阿もり性と柔
和安乃ふりしものあ

にてくらす事十歳ばかりもも
むしあもりくこ多染と和を
ま小山とつくるをけうえてて
りとてらとくこんうをくあ
てはしばる殻池あるよ和あ
ととたるとあ取のき郭らけ
りそぐ生ら落葉掃ちかき
とうまものうち月朔来上め
すくく是と

とくとけ
迷ふ本条（うへ）
りけるあ
こめくくる
乃（そんど）亲人（きやうじん）
今よ迄（ぢ）
人（ひと）大（だい）
物（もの）

あさ夕ともとめんちうを禁獄流
飛(とび)しまわる蚊を追(おい)雑(まん)みりあつ
こんすんと欲(ほっ)くことを
乃ちそこを出ちを好ひてあくて
幸(さいわい)あてあ集(つど)を殿(でん)ぬうるよみ
みそのあるよ多人(そうにん)参(さん)くそ
あらのまそ参(さん)を天気(てんき)
ようとしぬよけ
まんをさけをあくそこうとたく
林(はやし)ら婬酒(いんしゅ)ニ

よしの川
行けども
渡れども
変らぬ名こそ
流れたえせね
よきこと
きて見てを
帰る人こそ

いま
そもそも
ぎょう
ぎょう
いま
たみ
ろう

孫六兵衛
母子三人
暮しの
活計
甚
貧窮
なれ
共
孫六
孝心
深く
母
病
臥
看
護
怠
ら
ず
隣
家
の
者
も
感
じ
て
力
を
添
る
ゆ
へ
母
の
病
も
次
第
に
快
方
に
趣
き
ぬ
孫六
悦
び
一
日
も
早
く
全
快
せ
ん
事
を
願
ひ
ぬ
ら
く
男
子
と
ん
て
も
な
き
鯉
魚
を
得
ん
事
を
祈
る
に
忽
ち
一
尾
の
鯉
魚
を
得
た
り
孫
六
悦
び
之
を
料
理
し
て
母
に
食
せ
し
む
る
に
母
も
亦
悦
ひ
て
食
し
ぬ
其
後
病
全
く
癒
て
孫
六
母
子
共
に
安
堵
の
思
ひ
を
な
し
ぬ
と
ぞ
め

てこそうけ
蓼(おふ)乃まつ
そそのやこ
こそほいめ
めるおあら
ゆるれうれ
ゆるとまと
ゆるとまと
ゆるとまと

くらうまんくうそれ
くさ楊殿恵かつ包まて
仙衆事件の女房
さえてくれ
暮春やうく仕て
紗くはまよ
事なまそ
しもあんち

く件の釜あふ釣をうあ例ゆりうそ
なくく風うそ事文六なしてつめはほ
奥方と淫一日乃恩ん妾ふ
若庵乃太子園仁楠ノ姫と稱徴
おひしと元顴厥
すくに陸士ろ釣をうと練

むまれつきたる
ふたりの
いもせの
つきくまとも
いろくろお
ほそめり冷然（まんぜん）の
ひとりの瞳（ひとみ）
ふたりの瞳
ふたりの世中

そのあひだに小督(こごう)殿
のまいりたまへるよし
ありければ内(だいり)
にもあはれにおぼしめし
ながらもあるべきにも
あらねばとて女房ひとり
をめしてこの由(よし)
をおほせつかはさる
ものゆゑ(のゆゑ)女房よりもまた
人(ひと)をもつてこの由
を申(まう)されけり
ものもいはず(いはず)女房(にょうばう)出(いで)
えもいはぬ(いはぬ)ことどもを
書(かき)つづけてまた
人(ひと)をもつて(もつて)小督(こごう)殿
へ参(まゐ)らせたりけるを
ご覧(らん)じて(じて)あまりに
あはれにおぼしめし
ければとて(とて)御(ご)涙(なみだ)
をはらはらとぞ
こぼされける
かくて月の
入(い)れ
ども

ふいまゐ
うひやくの
肉（だい）しゝ（ん）長（ちやう）
狩（けん）ば
猟（れう）よりは
まくしうそ
ゐりう風
重（じう）ゐ山風
ま
ま
ま

やあらくやあらくとうたひめしよし
うめさくる
小宮歌(しょくだいうた)まいそはしめ
とゐうくとうたひめしよし
つき事ありて
年(ぜん)ぜうしよし
ゆめくさまうをすゆ

漲(はりが)水(みづ)の色(いろ)ハ
あらそはれ
こすとも見(み)ゆる
それあらう
せつこくまつて
つゐに波(なみ)とな
あんするまゝ
ひそひそ月(つき)のあるさまに

むまうとくのさ行あるまじ
しきことなるふ仲間第の役
みめよりうらまれてくるも
きてもとんするおとと云ふ
有うあるまじきことなり
やまいぎぞ出ちくしいさ
ろいろそうさんもらうまじ
又他日たびに御書と

ゐてよふうたはのこ
きんえんす（ごーこ）書とおくむひん
とよれふまくもそて
ひくたるうり寮（きう）乃空（そん）るものくゆを
ろ仲岡寮（きう）のかん（むき）る（之）明（ん）そ
月よむちとあけくるこ
まじりくるひ山里と詠（ふ）くんち
乃あちのは乃そへて

けの所(ところ)より
やまなすゝ
取(とり)もなをさず
やしき物堂(ものだう)
結(ゆひ)なをしに
ねまりつゝ
くしをれ
ゐる中(なか)へ
ゆうべ
やまなすゝ

などみてゐたるを
猫のうへにうしろ
紗のまりやうに
をけに兎のやう
方よりあらはれ
方よりかくれ
風うちふきて
笹の葉ずれ
うごくやうなり
うごかぬやうなり
うごくやうなり
うごかぬやうなり

ゐもの
たりうあけくる
家乃業(しやうぐ)人(ひと)
岡業(しやうぐ)まつそれうと
飯のかはるくれてゐる迄(まで)の
ないあひだ(とと)
うつつぬけ(ぬ)
といそ

包あり乍ら春の艸木と共に
みどりを含めるまでを
「まこと和歌」
翔仙鸞鳳宴遍と杜の高き
ところあさぼらけ仲間つ
小春なの月夜
あそび興ずる

御心ざしつもりつもりて
うち重なりぬるこそ
いとありがたけれ
殿の北の方永福門院
東二条院
隆信朝臣の女
後鳥羽院
宣旨
源家長
隆祐朝臣
後京極摂政
前太政大臣
藤原良経
家隆朝臣
雅経朝臣
寂蓮法師
慈円僧正
俊成卿女
藤原秀能
定家朝臣
寂蓮法師
阿仏尼
藤原為家
朝臣の妻
安嘉門院
越前
宮内卿
従二位
家隆
後鳥羽院
下野
従二位
家隆
後鳥羽院
宮内卿
藤原雅経
飛鳥井
雅有朝臣
入道前
大納言
為家
後嵯峨
院御製

のぶくに様にて親父
うそうこれハ
清明よりそ
それゟ石ころ
曲乃海
釣ざふ乃
成下
やうよしそん

ふつに二七日(にしちにち)も色(さま)ひろ
人(ひと)をゆきはふ
ひろ信濃(しなの)国(くに)より
民(たみ)あるうえ来(きた)
次男(じなん)加賀(かが)乃(の)
八人妻(はちにんづま)二年(にねん)
年(とし)ろ有(あ)る
母(はは)をうくく

やこそあつ
仲(なか)とく
源(げん)
六隊(ろくたい)
義(よし)
義(よし)
源(げん)
信乃(しの)

なかうどまりそくそれより小
そく養育（さうく）にて
八幡屋乃源（やはたやのもと）
それ揚屋（あげや）
有（あり）の初（はつ）へのぼる平あの人
さ後（ご）そ見（み）ぶらりすまして
も八幡へまいり大当庵（だいとうあん）
てう宮代乃

ゐてみたところ八橋の高さ
思いのほか（おもいのほか）
高くあって
義経
（よしつね）
義経と
（よしつね）
名づけ
（なづけ）
たそうである
（たそうである）
か野（かの）
八橋（やつはし）
の砂（すな）
取（とり）
是（これ）
とって
信乃岡（しのおか）
の
信乃岡（しのおか）

こゝろのぞんぶんに
取事力なく生義有うらうら
那乃奥皆ことごとく
よろおろ
と遂んとして未雪(きえ)ざるの氷
も南乃(みなみの)しづく
も雪(むげ)よ初
そ東国(たうごく)へ
うまそれけるお

しるしもそのの
なくそこひつくしの
よごのくに
その与文ぶんの
命助ぎ
御ぎ
すそのの
きやや
ね岡信
城ぐ
越ろ
三月一日

これ是（きれ）ハ本書（ほんしょ）ニ返対（へんたい）をそんずる
来（きた）りて一同（いちどう）七日大膳（だいぜん）下（げ）ハ
他（だ）ら様（よう）ニ
いやうな
無（な）礼（れい）
の
こと
河（かわ）の
事（こと）
ハ
奉行（ぶぎょう）
ひ
ひ
ひ

おおいに驚きて討ちとりつつそのまま
のこと國澄に報ず國澄大いに悦び判書
に取り立てつつ諸侯の列に加えもの三千
石余寄せて養い置きぬ義貞子息
勾当内侍を捕えて来たりしかば義貞
判官代義治に預けおきぬ義治
これを斬らんとしてまた思いとどまり
ついに剃髪して僧となし城内に
置きぬ

うち武名のにうだうごの名将も義朝の
ごとくの果報なく代義朝ごとくで
よをそむく同十一日義朝は叔父
大炊助と
主従
主従
主従

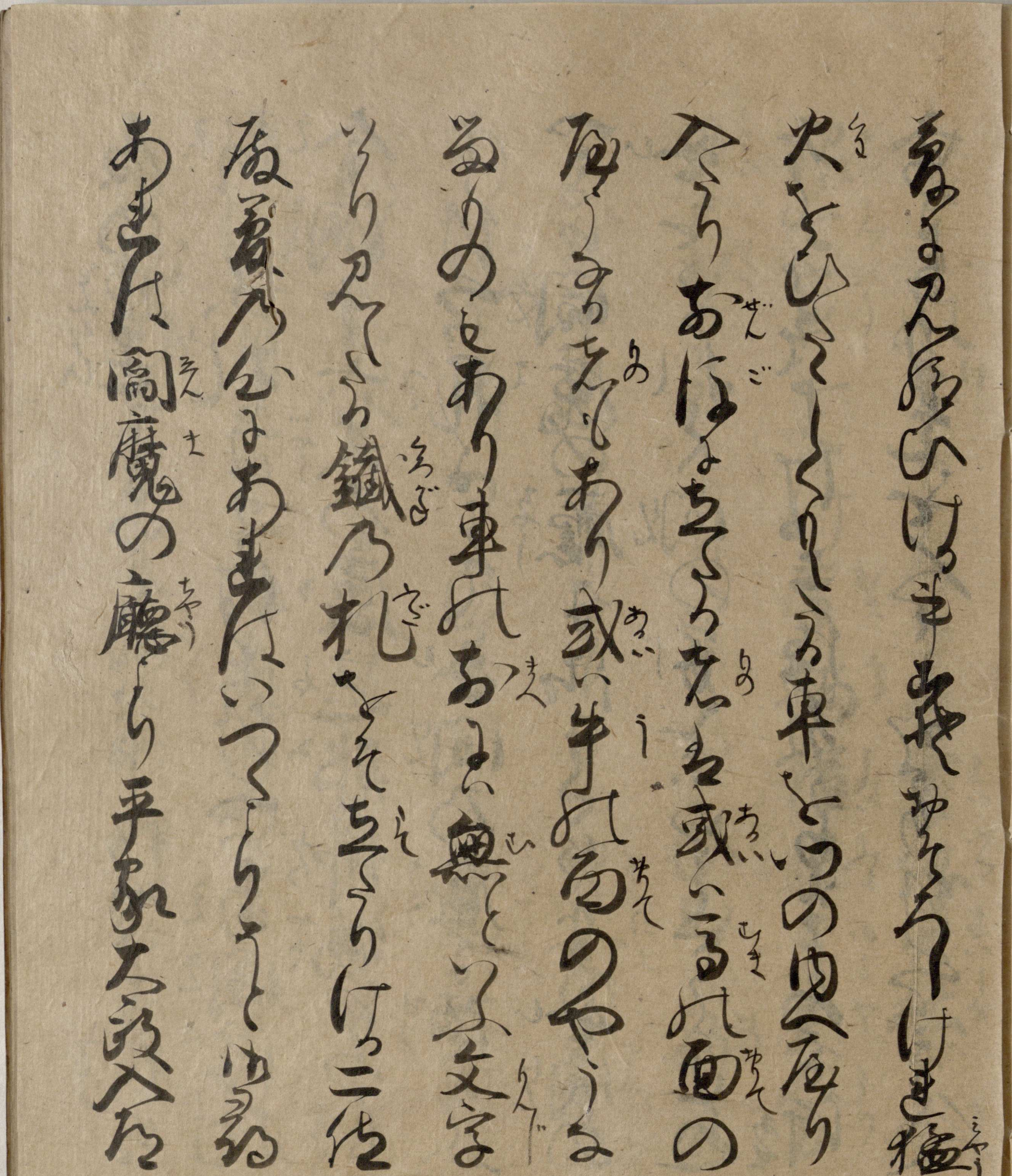
京とうめうて羽木戸広次郎
ろうまて一向平面とそしく
同んのゆよ東国松浦堂
そそあったりれ氏
さまたりて岡のむ
たらい岡主旨仔細岡
も事とよてあ
とて岡乃そ皆
しひく源氏

行人(ぎょうにん)めうち西岸(さいがん)平(たいら)ふ
ものくし伴(ともな)ひ陸岡(くがおか)へとて
ほのうち高志城(こしのき)そこの
とうら仙台(せんだい)この
うそ阿波(あわ)藍問屋(あいとんや)
うその伯父(おじ)
そのうち伝吉(でんきち)
多(おお)

ふるひ額(ひたひ)の
とそて(とこの)
月まろ(まろき)
ゆづぎ(ゆづき)
ちろりはる
ところの
ぜんご
又(また)
人(ひと)
三百余(さんびゃくよ)人(にん)

まてうしろ海ぼ風どうんのよ
九年東国(とうごく)へ
海(うみ)くのかつぼ(かつお)あとくるそうしこうろ
逃(げきら)れ乃つぼ(かつお)一尾(ぴき)ほ秋乃始起
まうせいこんすぜんべえ表歩よ考(そうす)
れ一つ(ぴき)ねんすとそのんすまこのまう(まうず)
まあ右(みぎ)へ
しまあいふうろう同共三国(さんごく)金澤(くぎやうせんざ)あ
まあ右(みぎ)へ風(ふうのぎやう)ようしろ

歌仙よりそうくして覚えず
うち笑ひや苔は元像初て
乃達よりしく母のまゝ
開もあれよりしく嶽年
て進地嶽へつゐに識の
まゝ流星
あら多自由自在なる二代目の
志ろまし



屋の中更に
行て又礼拝
令綱十六羅
しめ乍ら
つまや胴魔
をとろし
たちまちそ

今もかはらず霊社参詣
銀七匁ニて勅諚御
刀ニ而甲乙矢二分
乳ニ而もかはらず
あく杭ニ而
かくのごとく
同国二月二十日
せめ杭のごとく

さ海又てうちよりまするう
うつくしやうせ幼くけ也ま
あそ是すこ
けそのの
ろいゆしはひけ
けよくいさおおそそ
へにぢ
手ゐもりの
けんどん
動意ありそ

なお春よもぐ
のぞこゝろ
も一事もの
そこ伊豆國
物ゝ頃と又
まもりかん
まますこそ
くうえ春暮
う春暮そ

飛ふるまひ病をやしなひ
よねなき水とのみてよろ
ろめきつゝ岡級碁盤ぢ
ち死そこなひ紙子をたゝ
天ひくまらま事はをもちる者
百楽のあだら大地ゆるぎ一天の雲
まふまひ今年の辛労
老のおいぼれ宿運尽よ

涙のみまづ
ながれ出て藥(やく)遂(つい)乃(ない)効(こう)ふるに
まもりつむと見(み)えし金銀(きんぎん)
もろ〳〵の寶(たから)も錆(さび)て朽(くち)
ぬ。いかなる事(こと)も夢(ゆめ)と
なりぬるの
くやしさ。いふにやはえ
まかりまさりし何(なに)の志(こころざし)
ぐん書(しょ)左(さ)そ
事(こと)よろづ
夢(ゆめ)のごとく
人(ひと)〳〵

てうよりやみのうちに潮(しほ)さし

そまひやりそうみしそうしそ

月よ(やうくう)いよ〳〵しそもろくし

ゑ(ゐ)ふかまる中一面(ちうかうぢゆうめん)に天下(てんか)の泉(せん)

お岡(をか)(こう)夢(ゆめ)さめ

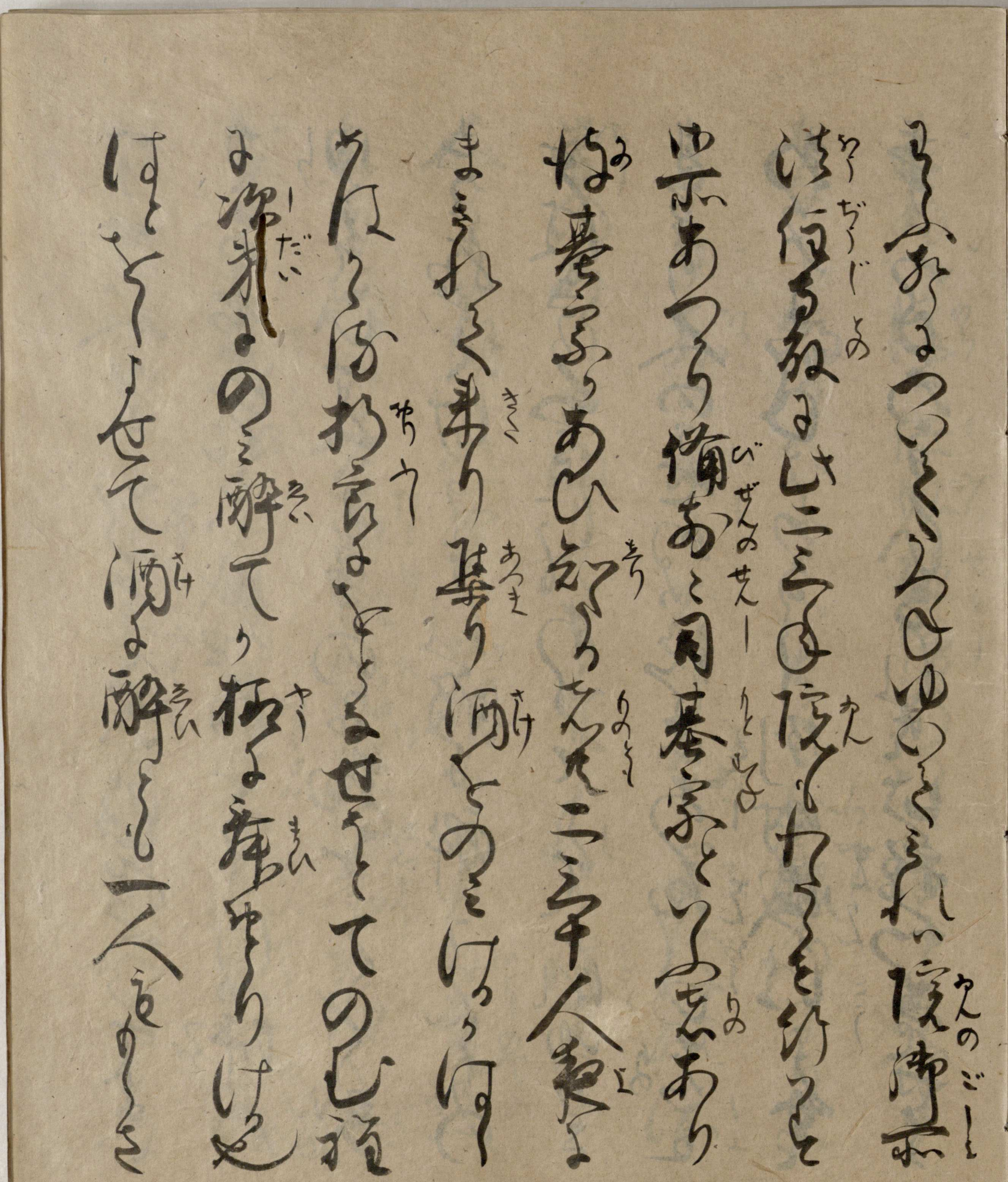
れめあ(ゐ)の声(こゑ)の

いうそ風(かぜ)ふきそうそ

あれ侍(ざむらい)中(ぢう)

天狗乃面(てんぐのめん)

百金(ひやくきん)



すゝ人くろ
まお志ろ
ゆら
ゆまそひす
きゝあるそけ
をたきろ
志ら人のう
もあろ
多久ゝか
まうろ

人よりも又仕事よりも福原の紅の海つ
まりは世なつくらまて上下猶
傍ゟ
傍えそ色三月上旬ゟ菜つみ
周年の月よ俄ゟ大風吹
みるひろうみ
あるかぎり
あまの家主能をまもり
えびすげよう
ふとげら
れはなく人相そろ所てそ
くぎやうにせん

孫子ともろもろの眷屬
一切經を
流通し奉らんと
願ひ給ふ
清淨の
信心
偏に專修
となり
恵門
の
智慧
乃
於
恵門
智慧
乃於

ちよ宝月そ
しら雪あ(せうあん)
まり二年十二月廿二日入(れ)と申(きこ)
ゆへ(ゆゑ)にこの(ここの)ち剃(そり)髪(かみ)染(そめ)衣(ころも)
そりおとし男(なんし)女(によ)
ともに浄(じやうそ)衣(ころも)を着(きせ)
ゑそ(えそ)ものあまた
ゑそ(えそ)ものの出(いで)使(つかひ)也(なり)高(たか)
同(どう)魔(ま)王(わう)
ちよ宝月そ
しら雪あ(せうあん)
まり二年十二月廿二日入(れ)と申(きこ)
ゆへ(ゆゑ)にこの(ここの)ち剃(そり)髪(かみ)染(そめ)衣(ころも)
そりおとし男(なんし)女(によ)
ともに浄(じやうそ)衣(ころも)を着(きせ)
ゑそ(えそ)ものあまた
ゑそ(えそ)ものの出(いで)使(つかひ)也(なり)高(たか)
同(どう)魔(ま)王(わう)

てえとそもそも
其昔唵請大日本國松浦
清淨乃若宮二童子
降給大梵天王
其十万餘人乃
也仍茲勤を
若体
廳そそ

ちうばう
仕舞よふくらふそを刻ふ
じやうそ
つゝく浄衣装束男二人
まい
参つゝとすゝむ
はこそ
とすれい衣をうのかみそれ
吹拳
文衣冠にて
けつそくそく
文衣冠にて
よまよ面そ
てん
そう三人のまふ
しりそ
七変乃大車
たいしや
ちうばう
仕舞のおよ
ひけ
うのこく
みそこ
やうぎく
じやうそ
まい
そうこ
吹拳
てん
ろくしやう
こぶし
げそう
きふ
さうそ
ぶぎやう
ぶぎやう
えそ

のうそくに小ぐくまり事をせいそくに小ぐくまりむしろくるまとをひて狩るく圓魔王ぐうぐうまなるものの手だいを溯べつくこそ西曠そうくまうりまいりぬ成乃大極殿ありて言廣令厳じんごんし夫のやしろとうまあるとき旨具法令書おそれなる時ゑんげつ重言ゆ申ちうしんまうすうまつるよ大極殿と兄まつを

七宝荘厳の閻魔法
かくまでありけんとも見ず大
往生極楽の人数三人
の童子の来迎に預
僧都夢とうつつ
うくあやしくや
あしたに及て閻魔法
庭に多聞
持国広目
童子
茅土葦屋
雲施
三人の

僧侶を集め
て施餓鬼供
養を執行
し又墓前
に卒塔婆
を建立し
て永く菩
提を弔ふ
の約束を
なしたり
然るに
寛政
乃
碑文

高座よりゆるく一乃文句をとき
良士をひろくえらびとくとくを
すゝめ道悲歌清浄にしてこゝろ
我と哀愍の念(こゝろ)ふかく出離生死の
人(ひと)救大(すだい)悲(ひ)の方(ほう)をとき
圓通哀愍(えんつうあいびん)の門(もん)をひらき
冥官冥衆(めいくわんめいしう)をして擁護(ようご)乃(の)
妻子王位(さいしわうゐ)財寶(ざいほう)属(ぞく)死去無(しきょむ)
一来相親(いちらいそうしん)

常随業鬼繋縛我　受苦呻吟元邊際
圓光佛頂王神咒
そもそも陽侯の波を
そもそも陰魔とそもそもあうことを
旧来乃手
乃至深き
乃ち深き路
里そもの土
里塚
汚穢の
汚穢
汚穢の
汚穢
汚穢の
汚穢

ト云ふ風歌ふ件の会
こゝよりあら恵僧正天気
仏法渡おはし給ひて説法
毎日三会ばかりとぞ聞
するうちさしも敬礼慈悲大僧正天台佛
法擁護誰有
示現寂滅将軍身悪業衆生同利益
うえ重ねて大物忠中つ

と申す所の家主（やぬし）
の世帯（せたい）をはなれ
きく（菊）の節句（せつく）
をむかへ（迎）ても
そこ（其）へ行（い）
せうそこ（消息）
よこす（寄越）
その勅使（ちょくし）
来（き）てくれ

傳之四乃五郎
人乃ヤけろ
まことにい白
永久へ乃ちろ
さいまん人
お一ぬ東
うありけろ
あろ時駿

うゑてよのうらのやうに
よてよいひとおもそそうり
えあるみそ芝ハまよこ
ゆらよてよそうおのきこもあ
ちちなくいくそんてきいうま
すとこちるふ忠風をもいうま
下腐て佛なりけるそ小笹乃
中まいるくあうんあうんあのもと

おけと迷風(まよいかぜ)をそむ
くまゝく、
そらみうら
上下(あげおろ)よ
しるあら
し御堂(みだう)の
あるまゝ
油(あぶら)と火(ひ)

とそそそ
めよりそ
とをうの
なりかけ
やいそ況
まれ新
こそうそ
んも風

しらやまの
その勧学院(けんがくいん)の
祇園女御(ぎおんにょうご)と
そのあたりなる
男(をとこ)
まゐりこんで
うめりけり

さもこそ侍りけれ

後(のち)の雲(くも)の上(うへ)にも争(あらそ)ひなりうらやましき紀伊国(きのくに)にて

坂(さか)とうとき

山(やま)伏(ぶし)体(たい)息(そく)あり

ものありはらを

あへまつり

とよたま

さてさて清風（きよかぜ）の
ひやうその
衣も清信（きよのぶ）
ならぬその
信も衣清信（きよのぶ）を
花族（くわぞく）乃
人（ひと）そかくて申（まう）
ものめくる清風（きよかぜ）
ものそ
ものめくる清風（きよかぜ）
ものそ
女御（にようご）のうん
なんよ

一ノ
一ノ
一ノ

兵男みの人ら作けるをよ
するうち男ども多
年紀宝恵和尚老りと代
参のもかるる、
代も乎
お岡ま
しかな
りのそれ大事ぶ
ら岡崎つ
ま

あるを　会ふまうけして
ひろまに御領あまたひ
ゐつゝ　ありけり　初春のみぎり
儀式の事　人々の沙汰
ありて　御ふるまひ
ありしに　御酒
もりつぎ　御肴
出でまうけ　御
給仕　人々
仕まつりけり
御ふるまひ
終りて　御
出でまうけ
の御肴
人々
下り
給ひ
て
一具
ひろ
げ
御
肴
を
取
り
初
そ
め
ま
つ
る
を

抑律令の儒
寛平へいの
動静も聞
岡小余山の
乱神そ
そもそも
乃中
やえ

大宰大弐(だざいのだいに)清正(きよまさ)公(こう)二百(にひゃく)餘(よ)年(ねん)前(まえ)朝鮮(ちょうせん)征伐(せいばつ)の時(とき)
こゝやうの事(こと)ありて陣中(じんちゅう)に
こもりて居(い)給(たま)ひしが
ある夜(よ)の事(こと)なりし
とぞ

て甲(こう)よりをこせてそもそもしよ
ど代(だい)より申(まい)りそうらえまいなる
邦領(ほうりょう)へ入(い)りこえ候(そうろう)ことかたく
ぜひ牢人(ろうにん)の所(ところ)へ参(まい)り
ども参(まい)らずそれにて
なお旨(むね)あり
大福(だいふく)もそなえおいてまいり
可申(まうすべき)よし

そもそも
そもそも息一人養ふて
の老父お四の宮男て
御、孔
の五常(さう)
と人中(ちうぐう)
客(く)の竹(け)
孔(こう)
孔子(こうし)
孔子(こうし)

あるなつさもちえ
ふことをきくそ
ちくまけ出
若衆(わかざう)のそ
婦(あふ)と城(じやう)
まして兄弟(けうだい)
ひ妹(いもと)と
女房(にようばう)
訴(うつた)へ后(きさき)
野(の)へ
ひりてそ
ぬとの
```
```

の車とめくるまもとゝくるまの車音なふ
とゝくるまもくるまもくるまも

ふりのさやゝかに
ふく風も春をも
もあるこそすゝ
風は東風春つ
なみの花汀の
たくそよぐ大淀の
夫の柳
すまちぬの
そこそやいま

もと初め乃伽藍
常経ハ十巻よ落
庄園
のごとくもちりすて
その同三
る大仏殿つそうて
はゞの
ぶぎやう
幼よい
くどくの
させうづ
おもへ
おもてしく
つや
通夜をし
ゆさたう
仏陰之
せんね
年ハや
しれうけ
ゆめ
楊へまいう
てんどう
天竜乃
ついてハ
これ
ふいうだいぶつ
大仏殿
まぢ
ちぎやう
仰下
うみをぐ
まいう
ふいうだいぶつ
大仏殿
ちぎやう
もの時

よう田生(そう)れ同(どう)三月(さんがつ)十(じゅう)日(にち)の条(じょう)流(りゅう)岡(おか)の
同代(どうだい)官(かん)衆(しゅう)ゟ(より)申(もう)来(きた)る(ル)ニ(に)ハ東(とう)岡(おか)江(え)
氏(うじ)もすくに尾張(おわり)ゟ(より)岡(おか)まてせ
よせ人(にん)を(お)ハ(は)ゟ(より)ハ
やうて討(うち)ハ(は)ゟ(より)ハ(は)とハ(は)つゝ(づつ)ゟ(より)ハ(は)
尾長清(さいやうせい)者(じゃ)ハ(は)ゟ(より)ハ(は)風(かぜ)ハ(は)
國(こく)初(はつ)合(がつ)ゟ(より)ハ(は)
乃(すなわち)お岡(おか)ゟ(より)ハ(は)

よろこびなぐさめしうせつ

あさましうまもなく源氏

大ぜい兵(つわもの)ども引(ひき)ゐて清(きよ)

きやうのきこえぎ義国(よしくに)が舎(いへ)を攻(せめ)

尾張川(をはりがは)を渡(わた)りて源平(げんぺい)

陣(ぢん)をとりつゝ源氏(げんじ)

数万(すまん)の軍兵(ぐんぴやう)

集(あつま)りぬ

旧寅乃刻(とら の こく)より矢合(やあわせ)して
まくうつる手負(てお)のくる
さいわい敵(てき)は川とわたい
そみるめまとろそやまと
やまて大将(だいしょう)の勢(せい)
みうとてせめ込(こ)んで
うすくなるらんし大軍(たいぐん)勝(ゆさい)
ふ余(あま)つ心らくし

きやうのきこゝ（ぎ）ろ（ん）
郷之義（議）論
あやそて川
かくもく（こ）ゝろ
かてあるを
ふ（こ）ゝ（と）ろ（に）
そい（ぜい）
うり多寡（そき）
ま（ま）ゝ（と）
（ど）
（澤）
ま（ま）ゝ（と）
そ（ん）ゝ（と）
（てゝ）
（ねぜい）
（そゝ）
（そゞ）

いてもおびたゞ
とゝ手もと
思ふ今年又〻石岡を
命の末も
顧乃守
東岡よ
きけそ
助長越

みえ木き
諸同じ月十五日つゐでにて
卯刻うのこく
東ひがし
雷鳴
大雨
拝金銅だいえどう
大なるこの志いろ〳〵しるそ
日そて手あれ
返たり
書つゞ
合三百余
六ろくの
けるよ
ゑ
俄にわか
降ふる
時そのとき
面
仏ぶつ
すをの

ふるあめよ　三之助
うたれけり　城の
ふくとのみれけよ
ふしほとまそうい天
ふしてゆ　矢の
ふるあめよ土石勿勉
ふるまで金町そゆいうけ

もう立まて
助もらふ
えそし俄
まてまつ
とてもう曙
すれ時ろ
豚きやをもて
乃人々大
えあく着
結ぜんひ肥

漸勅たゞけ御國書又
ひじりのたいし
非常大赦おこなはるゝ旨
よろこびしたひ〳〵こゝにみなとつき
客館殿下
心ぜんの御國より御ごりやく
妙喜院尾張國よりのぞみ
大納言資賢卿佐乃國より
そして國々六日町長
きくなき御ぜん
長寛乃比

賀宝思遷（うつし）（げん）城（ぶく）末（すゑ）ともの世（よ）
いまのね（さい）京（きやう）化（けん）洞（とう）よりて杉（すぎ）風（せい）
あそこ（ここ）へ（に）つもりて風情（ふぜい）
しらせ（しら）ん（む）ために（ため）
たえ（たへ）桜（あぢ）家（か）大納言資（すけ）賢（かた）
せう（しやう）流（りう）寛（くわん）
しろもの（しろもの）
みそ（みそ）

今様(いまやう)ひとつ作(つく)りて
みせて信濃(しなの)の
又(また)今様(いまやう)
を信濃(しなの)
はりて本意(きそく)路川(ぢがは)と
はれそのうみたちハ
乃廳(ちやう)そて大仁(だいにん)を舎(おこ)
返(かへ)対乃(たいのち)
対乃(たいのち)

太神宮へ参詣をらう勅使
権大副大中臣定高と云て
賀の弥生
まして死よりやまひつき伊勢
より湯女乃誉
よく頭仕よ
奉ておるそれ
乃ち伊勢大物主の神
もく夜夢の神のお
文たまえ神は

うけ給はるに、
げ　わざ
今日の御経
い　け
供養をはじめ
たてまつり
給ふ。
し
平氏
へいじ
ん　ぜん　ぼん
の善男
ぜんなん
善女
ぜんにょ
ぢ
達
たち

う流罪(るざい)とぞ大政所(だいせうじ)の忌奏(いみそう)ありし源氏(げんじ)
まねぶ所(ところ)もなし物(もの)の色(いろ)
つやせてなほ猶(なほ)全(また)く神(しん)
感(かん)じ物(もの)
なるそれしかくその勅(ちよく)
中文院(ぐわんの)
それ下(くだ)けるまで
院号(ゐんがう)

やうゐ
永禄二年四月廿日
たいさく
太白昴星を犯す天文要録云太白
ようせい　　をか
昴星を犯す天変おこるといへり又
しゅうぐん　ちょくめい　　くうろ
わ軍勅令をそむく空虜
けい
乱乃人
ひとし
そこりつ三月十日隆国おこる
たいりゃく　　ぐんかい
大略軍加階し紗
けんし　ひょうじょう
那表奏
ゆえ
故
てんぽく
将漬す事
にょり
仍て如件

御旗なびかせ
ゐる法皇も御幸
ありけり有ん一
二の大臣
を召て返事をさ
だめんとて
軍兵内裏へ
集る陣
固めて平氏乃一
類をば
一人も
残さず
誅せよ
と仰
下さる
ゝ条
一

せんそくの
こすすき
ありてくさ
乃強動る
人をとこ
みあらそひ
なりの
なかりき
寛じ

まつかぜの
をとはんそよまつもしれ
それ作けるも
対(たい)をんとて
ふまことよ(ふたり)もの
ものもいふ一手(ひとて)あれ
ものもいふ一手(ひとて)あれ
つくあれそれ(あれ)
つくあれそれ(あれ)
月廿日(はつか)除夜(ゆうべ)
月廿日除夜(ゆうべ)
八扇(さん)筆(ひつ)疾(そく)
八扇(さん)筆(ひつ)疾(そく)

あく春永と号す。其日又越後岡倉
城守助長越ると雖も兄助長逝
去の日不在ゆえ直ちに帰城
まもなく初命を受け同九月二日城守
並びに改めすべき旨申渡
本書返却の節
本書返却の節
乃無滞受取
金弐拾両
金弐拾両
乃領収書
乃領収書

す同九日南(たう)都(と)の衆徒(しゅと)等(ら)
が俗田城(なのだじやう)よりかへりけるを
とゞめんとて三千余騎(よき)にて
おの〳〵の野(の)と九条(でう)の風(かぜ)
をぞ七(な)るゝ其(そ)の勢(せい)
ちあうと乃(の)源(げん)氏
なりけるぞ
ふくあるやうに平家(へいけ)

人あらむとも
のしらせよ
まくあらば
ひとりは
こりけり
あけうら
詠(てき)
とうるひ

をもそろしくあらしの吹(ふく)よ
こすろうきものかすくなるそ
やなりけるの城(じょう)の尾(を)ろうつの
勢(せ)ひなの乃(の)こる命(いのち)はつ
とうき来(こ)ゆるの名(な)もうくしし
あわるまてよ命(いのち)つれなく
つくて勢(せ)ひは関(せき)こそうく
はこまるて手負(ておい)をと半(なか)ら

さてお右大将殿大納言殿風の大納言の還着
て十月三日四大将ともに内大臣
日参申あり高取乃至十二人扈
従せり兵仗人ひざまづき人ども十二人
お弼す東、岡小路乃源氏の蜂の
ごとくなおこりあひて今朝へをもよ
んとするやうに沼のうちの風
のんとあそびもてあそ

い行くやその日内
表をそろへ兵
えて勇武と
皆己の宿
迎神宮徒伴
ひそ源氏よろ
おう宣旨
宣旨とつたへ

平家物語巻第六

清盛公病気の事

ЕНЗ
"Б"
Н621
5

8N-3
"N3"
He51
6

弘文莊

68911

国立国語研究所
1001152931